

昭和六十三年十月三十一日 「講演概要と塾生の感想及質疑応答」

「競争社会と日本人」

南寮早大院 片岡 靖詞

ひろさちや先生の御講演の文章化を手伝わ
せて頂き、講演としてお話を頂戴したとはまた
違った趣を覚えている次第であります。

はじめに講演を拝聴したときは塾長などの
ご紹介の通り、非常にユニークな話しっぷりで
やさしく説かれてる感想を持ちました。しかし
ながら、文章化をしながら味読してみますと、
その内容に非常に深い内容を盛り込んでいら
っしゃったことが分かってまいりました。

まず宗教（先生の意思では特に仏教にこだわ
らなくて良いと思います）の意義としまして
「意識革命」あるいは「見方革命」ということ
を提示して頂きました。しかしこれは単に相手
からどう見えるか、相手はどう考えるかなどと
いう彼我の関わりを考え、視点を考えて考える
という意味に留まらず、新たな真理の開拓、あ
るいはその真理への発展をうながす意識の啓
発と思われました。

話は演題の「競争社会と日本人」というテー
マに従って、なぜ日本が競争社会になったのか
ということをも具体的な話を通して御説明下さ
いました。先生のお話によりますと、現在の日
本の豊かな時代のことを「もの余りの時代」と
指摘され、その社会においては、みんなが助け
合わねばお互いに生きていけないという切迫
した状況がない。ものの無い社会では、競争し
ていたのではみんなが（自分も）滅んでしまう。
そこではお互いが助け合い、仲間であり、生き
るために自分の必要なものでも分け与える意
識が芽生えたと御説明されました。

よく恵まれた環境にいますと、自分が恵まれて
いることも忘れてしまうと言われる。先生の
お話も同じで、基本的に恵まれていると、最低
限のことは保証されているため、助け合うこと
の必要性は薄れてしまう。そして人間の欲望だ
けが台頭し、より物質的な豊かさを求めてそこ
に心的に競争が生じるということでしょう。

そして先生の御講演は、そうした日本に何が

仏教思想家 ひろさちや先生

必要か、どうした意識を持つ必要があるかとい
う話に入って参ります。先生はそれを「布施」
という言葉に凝縮して御説明下さいました。こ
れは他律的な道徳を越えた、自己の内に湧き出
る宗教心であり、この「布施」こそはじめに御
説明のあった「意識革命」によって新たに開い
ていく真理であり、まさに宗教の意義をあらわ
すものと思われました。

私はひろさちや先生のお話を再び味読した
後、故前川喜作塾長の語録の中で言われている
「敬」の意味を思い起こし、左記に抜粋させて
頂きました。

われわれの「敬」という言葉は、われわれの
日々の行動、ものの考え方が、どこまでも神を
対象としているのだ、人間を相手としないのだ、
道徳を前提としないのだ、人間と人間の申し
合わせを基調とする道徳、モラル、こういうも
のではなくて、それ以前のものなのだ、真であ
り、善であり、美でもあるもの、いかなる時代、
いかなる場所においても、絶対に普遍性と妥当

性のあるものを前提とすべきものなのだ。

右の一節と比べてみても、ひろさちや先生の御講演は、和敬塾の精神の基本に相通じるものであったのだと思われました。

※当DVD収録のご講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。